

特集：卒業生便り

科学広報担当という仕事

倉田 智子（筑波大学 生物学類 1997年3月卒業）

はじめに

生物学類を卒業してから、ずいぶん長い月日が経ちました。私は今、自然科学研究機構 基礎生物学研究所という研究機関で広報担当の特任助教として働いています。ここでは、まだまだ少数派である、科学広報担当の仕事を紹介させていただけたらと思います。

基礎生物学研究所は、愛知県岡崎市に所在する、生物学の中核を成す国立の研究機関として設立された研究所です。現在は大学共同利用機関法人として、特色ある生物学研究を進めると共に、多くの大学と共同研究を行っています。研究室の数は30程度、大学と同じように、教授や准教授、助教、研究員、大学院生の皆さんが日夜研究に励んでいます。

私は、生物学類を卒業後、生物科学研究科で修士取得までを筑波大で過ごし、大学院博士課程から基礎生物学研究所に移りました。基礎生物学研究所ではアフリカツメガエルの発生に関する研究で博士を取得し、ポスドクとしてゼブラフィッシュの発生に関する研究に関わった後、希望して広報室に異動しました。生物学研究とはまたひと味違う、科学広報の世界に飛び込んで7年目になります。

学生向け広報としては、基礎生物学研究所には大学院があるので、優秀な学生さんの確保にむけて、大学院の特色や研究所で行うことが出来る研究について、発信することが求められます。冊子の作成、ホームページやSNSでの情報発信、大学生向けイベントの企画や実施などを担当しています。大学生の頃の自分を思い出しながら、生物学が好きな学生さんを楽しんでもらえるようにと企画を考えています。

また、広く社会に向けて、研究所で行われている活動や、研究成果を発信することは、何よりも大切です。マスメディア向けのプレスリリースの作成や、一般向けの映像制作、広報誌の作成、イベントの企画や展示制作などを行います。研究成果の内容を表す図や写真表現を作成したり、解説の文章を考えたりする時には、博士課程での研究経験が役に立ちます。また、マスメディアの方々との交流は刺激的でもあります。



メダカの捕食行動に関するプレスリリースのビジュアルの作成：メダカがミジンコを狙う瞬間を撮影



広報室メンバーと展示ブースにて（中央が著者）

研究所広報の仕事

研究所の広報室の仕事は多様です。研究者向け広報としては、研究所主催の国際シンポジウムや講習会に関するお知らせが重要です。多くの研究者が集まり、有益な議論が進むように、広報には力が入ります。イベントごとに、ポスターやホームページを作成します。シンポジウムのテーマに合ったポスターデザインを考えるのは楽しい仕事です。

忘れてはいけないのは、広報室は、発信だけでなく、外部からの声の受信を担当する部署でもあるということです。中学・高校からのアウトリーチ活動の依頼を受け取って、適任の研究者を探すことや、各種の問い合わせや要望への対応を行います。また、広報室自体でアウトリーチ活動を企画し、実施も行います。研究所が社会からどのように見られているのかを意識することや、社会のニーズにアンテナを張ることも重要です。

そして、ひとつひとつの広報活動は、「基礎生物学研究所のあるべき姿」を反映していることが求められますので、常に所長や教授陣などの運営メンバーとコミュニケーションを取りながら行われます。

仕事上の一番のやりがいは、博士まで学んだ生物学の専門知識を活かすことが出来る仕事であること。企画力や創造性を発揮できる職であること。そして、自分自身が“大好き”な基礎生物学研究所や、現場の研究者と深く関わっていただけることです。実際に実験現場にいた経験があるからこそ、研究の厳しさ、大変さがよくわかります。だからこそ、研究者のリアルな姿や、研究者が

苦勞の末に得た研究成果を多くの人に知ってもらいたいと願っています。また、研究者の目の回るような忙しさを理解しているからこそ、研究者が研究に専念できるように、広報業務における研究者の負担を減らし、効率的に進めることも考えます。

広報は事務系の仕事、と思われている方も多いかもかもしれません。実際に担当してみると、広報の仕事は、事務系の仕事（原稿のとりまとめや報告書の作成など）、技術系の仕事（ホームページ運営、デザイン作成、原稿作成、写真や映像の撮影・編集など）、研究系の仕事（広報ノウハウ集積や科学コミュニケーション実践研究）、そしてマネジメント（広報室の運営）のハイブリットであることがわかります。そして、従来の、「事務職」「研究職」の枠組みで対応することが難しい為、事務と技術と研究の狭間の立場の人材が必要になってきているのです。

仕事について経緯

さて、私自身、学生時代に科学広報の職に就くことを想像していたかという、まったく想像もしていませんでした。というのも、学生時代にはこんな職は存在していなかったのですから。高校時代に書いた将来の職への展望は「生物学が好きなので、その方向に進みたい」という漠然としたものでした。大学時代には「博士課程に進んで、その後は研究者か教育者（中高教員など）になって生物学と関わり続けたい」と思っていました。大学院に進むと、修士取得、博士取得に向けて集中する日々で、将来の展望について深く考える余裕が無かったように思います。恥ずかしながら、将来について真剣に考えるようになったのは博士取得の目処がなんとかたつ頃でした。気が付いたら、30歳も目前。この年齢になると、色々と自分の活動に制約が多くなっていることに気が付きます。例えば、勤務地。以前は、世界中どこでも働ける気がしていたはずなのに、いつの間にか一緒に過ごしたい家族が出来ていたり・・・。各種採用試験の年齢制限をオーバーしていたり・・・。ああ、若い頃（大学時代）は、自分は何にでも成れると思っていたのに！

博士取得後、研究者として働きながらも、職に対する自問自答は続きました。ちょうどその頃、政府が各研究機関に科学研究情報の発信の強化を求め、その担い手としての科学広報担当の採用が様々な機関で行われるようになってきていました。私は「生物学と密接に関わり続けながら働ける職」としての広報に強い魅力を感じ、基礎生物学研究所の広報担当になることを希望しました。運良くその希望は所に受け入れられ、広報担当になり、今に至っています。

広報の仕事に役立つもの

広報担当の実務は、先にあげたように、大変複合的です。この業務を行う上では、大学院で学んだ生物学に関する専門知識や研究経験の他、大学時代に学んだ様々な事柄が役に立っています。

まず、アウトリーチ活動を行う上で役立つのは、教職課程の修了経験です。私は、筑波大学で、中学と高校の理科教諭の免許を取得しました。教育学の基礎、専門知識を伝えること、人前に立って話す訓練など、教育実習で学んだ事は、アウトリーチ

活動を行う上での基本スキルと重なるものです。また、学校からのアウトリーチ活動の要望を受ける際にも、中学や高校の教育現場に関する知識が役立っています。

また、広報活動にはネットの活用が不可欠ですが、他学類開講の計算機序論の授業を受講したり、共通端末室に長々と居座って夜更かししながらネットを使っていた大学での経験が、思いがけず、役立っています。

大学時代は、実験やレポートで忙しい日々だと感じていましたが、その後の大学院生活やポストク生活の忙しさに比べたら、全然大したことはありません。筑波大学は総合大学なので、希望すればどんな分野についても学ぶ機会があると思います。皆さんにも、大学時代には、自分の興味にまかせて様々な事を体験することをお薦めします。将来、思いがけずその経験が仕事の役に立つことがあるかもしれません。

科学を伝えることの難しさ

さて、最新の研究成果を分かりやすく伝えることが私の任務の一つではありますが、これはかなり難しい仕事です。毎日取り組んでいても、“会心の出来”の境地に立つことはなかなかありません。それでも、「伝えたい」という気持ちを胸に仕事に取り組んでいます。

科学研究は、社会に支えられてこそ、続けることができる営みです。皆さんの卒論も、修論も、D論も、投稿論文も、多くの場合、社会に支えられて研究が行われています。だから是非、良い成果が出たときには、社会に向けてその研究成果を伝える事に取り組んで頂けたらと思います。

Communicated by Fumiaki Maruo, Received January 16, 2013.